稱讃 二二三号

二〇二一年七月一日発行



福井恒彰さんのイラスト　御本尊御入仏法要

新型コロナウイルス渦中
暑中お見舞い申しあげます

ワクチン接種後も外出時はマスクをし、三密を避け熱中症の予防に心がけましょう。

一　善人なほもつて往生をとぐ、いはんや悪人をや。しかるを世のひとつねにいはく、「悪人なほ往生す、いかにいはんや善人をや」。この条、一旦そのいはれあるに似たれども、本願他力の意趣にそむけり。そのゆゑは、自力作善のひとは、ひとへに他力をたのむこころかけたるあいだ、弥陀の本願にあらず。しかれども、自力のこころをひるがへして、他力をたのみたてまつれば、真実報土の往生をとぐるなり。煩悩具足のわれらは、いづれの行にても生死をはなるることあるべからざるを、あはれみたまひて願をおこしたまふ本意、悪人成仏のためなれば、他力をたのみたてまつる悪人、もつとも往生の正因なり。よつて善人だにこそ往生すれ、まして悪人はと、仰せ候ひき。

『歎異抄』第三条

発行　浄土真宗本願寺派　稱讃寺
〒一二二―〇〇七五
東京都足立区一ツ家三丁目五番二〇号
TEL　〇三―五二四二―二〇二五
FAX　〇三―五二四二―二〇二六
HP　shousanji.com

（意訳）

自己肯定の人さえ、仏のいのちに帰するのです。まして自己否定の人はいうまでもないことです。

ところが世間の人は、自己が仏のいのちに帰するのだから、自己否定の人より、自己肯定の人が優先するというのです。

しかし、それは仏のはたらきかけということを知らないのです。

わたしたちが、仏のいのちに帰するのは、自己肯定の力によるのでなく、仏のはたらきかけによるのです。

自己肯定の力で、仏のいのちに帰するということはできないのです。

だから仏のはたらきかけがあるのです。

ですから、自己肯定のこころを捨てて、仏のはたらきかけにまかせるなら、ほんとうに仏のいのちに帰することができるのです。

人間が自己肯定によって、仏のいのちに帰することができないからこそ、仏のはたらきかけがあるのです

序）も著述されておられます。

『歎異抄』を読み解くにあたっては

らきかけの目標なのです。

ですから、自己肯定の人より、自己否定の人がなおさらだ、と仰せになったのです。

この意訳は、三十三年ほど前に出版された『歎異抄　最後の一人を救うもの』（序～第十章）に掲載されているものです。

著者の古川泰龍氏（一九二〇～二〇〇〇）は、真言宗の僧侶でしたが、死刑囚の教誨師をされておられましたが、冤罪救済に尽力された方です。また、熊本・玉名に生命山シュバイツァー寺を建立し、カトリック教会の別院も設けられ、宗教を超えて会話・活動されました。当時のローマ法王ヨハネ・パウロ2世とも三回面会しておられます。

また、中国の南京虐殺記念館で犠牲者の慰霊法要を行いました。

そういう古川氏は、『歎異抄』に魅了され、『「他力」を明かす―続歎異抄・念仏のこころ』（第十章～後

金子大栄師に多く指示されました。

また、鈴木大拙師の「霊性」という言葉も出てくるのですが、「スピリチュアル」を日本語に訳した一表現でありますが、私としては、「霊性」という訳にはシックリしておりません。

『歎異抄』は多くの方に読まれ、そこから親鸞聖人の思想やお念仏に傾倒されることをお聞きしてはいるのですが、私などは、初めて『歎異抄』に出会った時は、強いインパクトがありましたが、なかなか、その真意が理解できないところもあり、現代の私の生活と、重ね合わせる事が出来ないでおりました。

しかし、古川氏の『歎異抄』第三章の解説で、善人を「自己肯定」する人と意訳されておられ、私にはとても新鮮に感じました。

「自己肯定」を養う教育が進められております。とても善い教育方針なのだと思うわれる反面、「善人なほもて往生をとぐ、いはんや悪人を」が埋もれていきそうです。

稱讃寺
永代経法要　厳修

日時　六月二十七日(日)
　　午後二時～午後三時
日程　一四：〇〇　おつとめ
　　『仏説阿弥陀経』
　　一四：四〇　法話
　　一五：三〇





緊急事態宣言が解除されましたが、東京では感染が収まらずにいるのですが稱讃寺では永代経法要を厳修いたしました。雨が降り出しそうなお天気であり、住職が少々腰が痛かったものですから、屋上に仏旗を掲げませんでした。

予定では、六名ほどご参拝くださることでありましたが、早﨑光弘さんと中木原乃既子さんのお二人でした。

三人で「仏説阿弥陀経」をおつとめしてから、「み仏に抱かれて」を流し、お焼香をしていただきました

事前に、佐藤千鶴子さん、佐原もとゑさんからご懇志を賜りましたこと、ありがとうございました。

また、六月二五日、福冨ミサヱさんがご往生なされ、永代経の日に荼毘にふされ、夕刻、住職がご自宅で葬式・初七日のおつとめをさせていただきました。

その後、ご遺族の方が、お寺に来られまして、永代経法要のお布施をお届けくださいました。

ありがとうございました。

ミサヱさんは、お連れ合いとご一緒に帰敬式を受式なさっておられ、生前に院号法名を授かっておられました（恵了院釋尼華定）。ご遺骨はコロナが収まった頃、熊本のお連れ合いとご一緒のところに埋葬されることでございます。

福冨さん・福冨さんの娘さんの池田さんとは、お会いなさっておられる方もいらっしゃるのですが、稱讃寺で再会できることを心待ちしております。

因みに、稱讃寺カメラによるご参拝はこの日はなかったようです。

法話は、『歎異抄』のある解説に「善人」とは「自己肯定」する人を指し、「悪人」とは「自己否定」する人を指すとありましたことからお話させていただきました。

親鸞聖人御誕生八五〇年
立教開宗八〇〇年 慶讃法要 企画

親鸞聖人を知ろう

『親鸞聖人と東国の人々』

今井雅晴氏

二十四輩第二・真仏

真仏は性信と並ぶ親鸞聖人の有力門弟です。下野国大内庄高田、すなわち現在の栃木県芳賀郡二宮町（二〇〇九年三月、真岡市に編入）に本拠の道場がありました。もともとの出身は常陸国真壁郡の椎尾（現在の茨城県桜川市）の豪族であるとか、地元下野国の豪族大内氏であるとかいわれています。ただし、椎尾は高田から比較的近い地域です。

真仏の本拠の道場は、後に専修寺と呼ばれるようになりました。真仏の娘婿である顕智も協力して念仏布教に努力しました。彼らの集団を高田門徒といいます。

高田門徒は、親鸞聖人がしばらく住んだ草庵の跡と伝える遺跡を持っています。高田から二キロばかり離れた山裾です。その草庵は、そこの地名をとって三谷草庵と呼ばれています。

高田門徒の信仰の特色は、善光寺信仰を強調することです。現代に至るまで高田門徒が善光寺信仰を大切にしてきたことは間違いありません。高田は、主に東日本の各地にある善光寺聖が寄り集まる地域の一つだったようです。その地域で親鸞聖人の念仏信仰が広まったということでしょう。他の地域に住む真宗門徒からは、自分たちの真宗信仰とは違う内容だなと思われたはずです。

しかしこれもその地域の生活や信仰に即して親鸞聖人の信仰が受け入れられていったということです。

高田門徒は後に真宗高田派となりました。現在の本山は三重県津市一身田にある専修寺です。二宮町の専修寺は本寺専修寺あるいは単に本寺と呼ばれています。本山専修寺の本の寺という意味で本寺と呼ばれているのです。

二十四輩第三・順信

順信は性信や真仏に比べればかなり年齢的に下であったようです。彼は性信と同じく、鹿島神宮の神官である大中臣氏の出身であると伝えられています。本拠は鹿島郡の鳥栖にある同情であり、引き続いて近くの富田にも道場を建てて住んだようです。

鹿島郡というのは、元来、鹿島神宮を経営するための費用を賄う地域です。このように大きな神社の経営費用を賄うために設定された郡を神郡ともいいます。日本の何カ所かにありました。

鹿島神宮は関東地方全体の宗教界・俗界に権威を有していた神社です。奈良・平安時代から朝廷では藤原氏が大勢力を握っています。その祖先である藤原鎌足は鹿島地方の出身です。そのこともあって、鹿島神宮は大きな権威を有していました。

順信はその鹿島郡のなかで親鸞聖人の信仰を受けて活動していたのです。彼の率いる門徒集団のことを鹿島門徒と通称しています。当時の社会の常識からいえば、鹿島門徒は鹿島の神を拝まざるをえません。少なくとも、拒絶はできません。彼らは鹿島信仰のなかで親鸞聖人の念仏の教えを受け、日常生活を送っていたと考えられるのです。

親鸞聖人が順信に送った手紙などは今日に伝えられていません。しかし聖人と順信とが深い心の結びつきがあったであろうことは、親鸞聖人の没後、その遺族を順信が守り続けたことでも分かります。

親鸞聖人が亡くなったのは弘長二年（一二六三）でした。十八年後の弘安三年（一二八〇）十一月十一日、聖人の廟堂で毎月行われている法要について、そこに詰める念仏僧たちの怠慢さを責め、改善を申し入れている手紙があります（「信海等書状」）。

御念仏衆の中に申さしめ候。そもそも、国々の故上人の門徒の人々、毎月二十七日の御念仏の用途、乏少たりといえども、相はげみ候の処、時々闕怠の由、歎存候。訴える所に候。彼の用途をば大谷の覚信御房の御方に□かれもして候はば、念仏衆けたい候はば、他僧をも請して、其の役を勤め致すべく候。此の旨を以て衆徒の中に御心得有るべく候

恐々謹言

十一月十一日

信海（花押）
顕智（花押）
光信（花押）

念仏衆御中へ

（一部を読み下しにしました）

毎月二十七日というのは、親鸞聖人の命日の前日です。毎月、法要を行っていました。「御念仏の用途」というのは、念仏衆へ差し上げるお礼のお金のことで、「闕怠」は、その念仏衆がサボるということです。「他僧をも請して」というのは、あなた方をクビにしてしまうぞ、と脅しているのです。

文中には覚信尼の名前も見えます。しかし覚信尼は念仏僧たちに強い態度を取ることのできる立場にはなかったようで、代わって順信たちが申し入れているのです。手紙の署名中、信海が順信のことです。彼は正式には順信房信海といいました。顕智は高田門徒、光信も高田門徒系の親鸞聖人の直弟子（面授）です。彼らのリーダーとして大谷廟堂を守っているのが順信だったのです。

鹿島郡鳥栖と富田の道場は、いずれも無量寿寺として今日に至っています（鳥栖は本願寺派 富田は大谷派。茨城県鉾田市）

家族・友人のなかの親鸞聖人

友人のなかの親鸞聖人

私たちは、ここ数十年、何となく錯覚してきたことがあります。それは、親鸞聖人は東国で孤独であった、と思い込んでいたことです。おそらく、それは聖人七〇〇回御遠忌のころに固まってしまったイメージの一つだったのではないでしょうか。東国の荒野で一人権力者に向かって闘う親鸞聖人。

しかし東国には、法然の門下で親鸞聖人の相弟子たちもいたのです。まず、親鸞聖人の東国行きを全面的に援助したと推定される宇都宮頼綱がいます。彼は法然上人の俗弟子の第一であり（関白九条兼実を除けば）、法名として実信房蓮生の名をもらっています。また武蔵国には熊谷直実の遺族がおり、上野国には大胡実秀、下野国にも薗田某、鎌倉には北条政子など、多くの武士身分の人たちが散在していたのです。彼らは法然門下の俊秀である親鸞聖人のことはよく知っていたはずです。当然、越後国へ流されたことも。親鸞聖人は、まず、友人関係では私たちが思ってきたほど孤独ではなかったのです。

家族のなかの親鸞聖人

親鸞聖人は単独で東国へ来たのではありません。妻の恵信尼さま、娘の小黒女房息子の信蓮房、四人でやってきたのです。無理に、親鸞聖人は孤独であった、とする必要はまったくないのです。

さらにまた、妻の恵信尼さまは親鸞聖人に引きずられるようにして、自主性なしに一緒に来たと思うべきでもありません。当時の女性は自立していたのです。私たちは、昔の女性というと無意識に江戸時代の女性・明治時代の女性を連想してしまうのです。社会的にも家庭的にも弱い立場にあった女性たちのことです（でも、実際の家庭内で、あるいは社会的にどの程度弱かったかは検討しなおすべきであると思います。江戸時代の離婚で有名な三行半（みくだりはん）でも、夫が勝手に書いたと思われていたのですが、実は妻が自分の権利を守るために夫に書かせた、という研究結果が出ています）。

京都の貴族出身である恵信尼さまが、自分の意思で越後へ、そして関東へ親鸞聖人と行動をともにされたということを基本にして考えていくべきなのです。つまり、親鸞聖人と恵信尼さまとの関係は、夫唱婦随（ふしょうふずい）ではなく、夫婦の協力関係であると考えるべきです。私は、たとえば親鸞聖人の主著『教行信証』は聖人の名で世に出ましたが、ご夫婦の共同作業の成果と考えるべきであろうと考えています。

以下は、よく知られた親鸞聖人ご一家の系図です。



親鸞聖人は東国の人々をいかに感動させたか

念仏往生の教え

先ほど山伏弁円の項でお話ししましたように、私は東国の人々が親鸞聖人の方に顔を向けた理由は、聖人の説く念仏の思想ではなく、まず彼らに与えた感動であったろうと考えています。山伏たちが説く念仏の教えは、それによって人間社会や自然を動かしていくことのできる、自力の思想に基づいています。

これに対する親鸞聖人の念仏は、阿弥陀仏を信ずることにより、極楽往生できる覚信を阿弥陀仏にいただき、現世（げんぜ）をよりよく生きていくことができるとするものです。その信心も、自力ではまったく救われない衆生（しゅじょう）を憐（あわ）れんだ阿弥陀仏の広大無辺の慈悲によって与えられたものです。念仏自体も、人間が自分の力で称えるのではなく、阿弥陀仏が称えさせてくださる。このように親鸞聖人は教えました。

しかし、それでは病気になったらどうするのか。難産だったらどうするのか。田畑に病虫害が出たらどうするのか。今までは念仏をはじめとする呪文を唱えて解決していたのに、それはしてはいけないのか。いろいろな質問が親鸞聖人に向かって飛んだことでしょう。聖人はどのように答えたのでしょう。残念ながら、そのときの親鸞聖人の声を録音したテープは残っていません。あるはずもありません。私たちたちはいろいろと想像をめぐらさなければなりません。

信心の念仏と信頼

私は先ほど、感動、ということをお話ししました。親鸞聖人が東国の人々に与えた感動は二つあると私は考えています。その第一は阿弥陀仏に対する信心、それを一般社会の人間関係にも使った信頼です。一般の人々は山のなかに籠もって修行しているのではなく、毎日人間関係のなかで汗をかいて働いているのです。信仰が直接その日常生活にプラスになるのであれば、分かりやすく、魅力のあるものと印象づけられるでしょう。『歎異抄』第一章に次の文章があります。

弥陀の誓願不思議にたすけられまいらせて、往生をばとぐるなりと信じて、念仏もうさんとおもひたつこころのおこるとき、すなはち、摂取不捨の利益にあづけしめたまふなり。弥陀の本願には、老少善悪のひとをえらばれず。ただ信心を要とす、としるべし。

また親鸞聖人八十五歳のときの、通称「夢告讃」にも、次のようにあります。

弥陀の本願信ずべし
本願信ずるひとはみな
摂取不捨の利益にて
無上覚をばさとるなり

これらは皆、阿弥陀仏への信心を強調したものです。一方、『歎異抄』第二章には次のように記されています。

親鸞におきては、ただ念仏して、弥陀にたすけられまいらすべしと、よきひとの仰せをかぶむりて、信ずるほかに別の子細なきなり。念仏は、まことに浄土にうまるるたねにてやはんべるらん。また地獄にをつべき業にてやはんべるらん。惣じてもて存知せざるなり。たとひ、法然上人にすかされまいらせて、念仏して、地獄におちたりとも、さらに後悔すべからずさふらふ。

親鸞聖人がいかに法然上人を信頼しておられたか、まさに感動せざるを得ません。それは比叡山での二十年にわたる修行の苦労、しかもその修行がならなかった苦しみ、その上での法然に救われたとする親鸞聖人の喜びと安堵が、今日の私たちに伝わってくるからでしょう。

親鸞聖人は法然によって阿弥陀仏に対する信心はもちろんながら、法然上人という人格を通して人を信頼して生きる喜びを教えられたのです。

さらにまた、「恵信尼消息」第三にも、次のような文章があります。

ただ、後世の事は、善き人にも悪しきにも、同じやうに、生死出づべきみちをば、ただ一筋に仰せられ候しを、うけ給はりさだめて候しかば、上人のわたらせ給はんところには、人はいかにも申せ、たとひ悪道にわたらせ給べしと申とも、世々生々にも迷いければこそありけめ、とまで思まいらする身なればと、やうやうに人の申候し時も仰せ候しなり。

文中、「生死」というのは迷いの世界を表します。「悪道」のなかの「道」というのは世界という意味です。つまりは地獄の世界のことです。親鸞聖人は、法然上人の行く所であったらどんな所へでもついていきます、他人が何と噂しようとも、たとえ地獄であってもついていきます、と宣言しているのです。法然上人ならば決して間違ったことはなさるまい、と信頼しています。万一間違っていても、それでもかまわないのだという決心なのです。

このような親鸞聖人の法然への信頼は、聖人の家族や東国の人々の知るところであったと思われます。そして人々を感動させたのです。それだからこそ、恵信尼さまのお手紙や、門弟唯円の『歎異抄』に強く示されているのです。

親鸞聖人の念仏の教えは、このような人間信頼の精神に裏打ちされているのです。人を信頼して生きる。それは一般の人々の毎日の生活を豊かにしたに違いありません。今まで、念仏をこのような精神で説いた人はいなかったのではないでしょうか。ここに親鸞聖人が東国の人々を感動させた第一の事柄があったと、私は推定しています。

※「信頼」される人間になろうとするなら、他人を「信頼」することだろうとは思いますが、なかなか難しいことですね。

稱讃寺　行事予定

二〇二一年　七月の行事予定

四日（日）日曜礼拝　午前十時
六日（火）のんのん法話会　午後二時
一一日（日）日曜礼拝　午前十時
一六日（金）のんのん法話会　午後二時
　歓喜会法要
一八日（日）日曜礼拝　午前十時
二五日（日）日曜礼拝　午前十時
二六日（月）のんのん法話会　午後二時

※お朝事のおつとめ　毎日午前七時
※お夕事のおつとめ　毎日午後六時

二〇二一年　八月の行事予定

一日（日）日曜礼拝　午前十時
六日（金）のんのん法話会　午後二時
八日（日）日曜礼拝　午前十時
一五日（日）日曜礼拝　午前十時
一六日（月）のんのん法話会　午後二時
　盂蘭盆会
二三日（日）日曜礼拝　午前十時
二六日（木）のんのん法話会　午後二時

二〇二一年　九月の行事予定

五日（日）日曜礼拝　休座
六日（月）のんのん法話会　午後二時
一二日（日）日曜礼拝　午前十時
一六日（木）のんのん法話会　午後二時
一九日（日）日曜礼拝　午前十時
二六日（日）日曜礼拝　午前十時
秋季彼岸会法要　午後二時

今日（きょう）もまた
幸福（しあわせ）を求（もと）めて
四苦八苦（しくはっく）

二〇二一年「心のともしび」七月カレンダーより

編集後記

私は「ＱＯＬ」（クオリティ・オブ・ライフ）は「生活の質的向上」と思っていました。

終末期医療に携わる医療関係者の方は、この「ＱＯＬ」を「いのちの質」とおっしゃっておられます。

『「ホスピスとは、がんで死にゆく人とその家族に対して、そのいのちの質を高めるべくなされる全人的ケア」と定義される。』『「いのちの質」、それは自分の死と対峙して、自分の死そのものをどのように迎えるかを考えるときに、最高度に高められることになる。』『かくて、死は決して人生の惨めな敗北ではなく、人生の完結であり、天国への晴れがましい旅立ちであるといえる』『このお方（キリスト）は死の壁を打ち破り、信ずる者に死んでも生きる永遠のいのちを与えてくださるんです。死は決して人生の終着駅ではありません。』『そして信じる者はいつの日にか天国で再び会いまみえることができる。』（『いのちの質を求めて　ホスピス病棟日誌』下稲葉康之氏著）等々、記されています。

浄土真宗と似ているようですが、妙好人のおかる御同行は、「つゆのいのちは　いつ終わろうとも　死ぬのじゃござらぬ　往くのでござる」を思い浮かびます。

また、「み仏にいだかれて」の二番の歌詞には、「み仏にいだかれて　きみ往きぬ　慈悲の国　みすくいを身にかけて　示します　畏さよ」とあります。

「いのちの質を高める」と「生死を超える」とは異なっていそうです。